



研究会再開の経緯

小林 克

1 火打石研究会の活動とその休止

火打石研究会の発足の経緯については、シレックス第1号に詳しいが、直接の経緯となったのは、江戸東京博物館で実施した火打ち道具作りの映像作成とそれに伴う現地調査であった。本研究会は、小林克（代表）、北野隆亮（副代表）、大西雅広、水野裕之、松崎亜砂子の5名が世話人として、2001年5月に発足した。2001年5月19日に発足準備会を開催すると同時に第1回研究会を江戸東京博物館で実施し、2002年5月25日には第2回研究会を同じく江戸東京博物館で実施した。会の活動は会員等が各地で調査した内容を、小林が2001年に立ち上げた「火打石研究会」ホームページ（以後HP）に掲載してもらうという形を取った。しかしHPは一度閉鎖してしまい、そうすると以前の文章を確認できないものも出てきてしまった。

そのため、HP上にあげて頂いた報告をまとめてニュースレターを発行することとし、2006年6月10日にシレックス第1号を発行した。研究会では2005年12月17日（土）、18日（日）と見学会・研究会を世話人の大西雅広氏の企画・手配により、群馬県吉井町（当時）と下仁田町で実施したが、この回より船築紀子氏が参加した。その後2006年11月25日（土）、26日（日）に岐阜県養老溪谷を中心に見学会研究会を開催した（詳細は次ページ参照）。

このような形で発足後、ほそぼそではあるが続けてきた火打石研究会であったが、その後、小林が江戸東京博物館から別の職場に異動し業務が多忙を極め、研究会としての活動は休止してしまった。世話人の中でも何回

か話し合いを持ったが、やはり世話人各位も皆忙しく、無理をして実施することもよろしくないという認識もあり、火打石研究会は休眠状態となっていた。しかしそうした中でも世話人の大西氏を始めとして注目すべき発火具の論考を発表されていた。

2 火打石研究会改め発火具研究会の再出発

小林は2015年3月に退職し、ようやく比較的研究の時間を持てるようになった。2015年に世話人の北野・大西・水野と4人の意志を確認し、火打石研究会を再開する方向を確認した。そして2016年2月14日（土）に水野氏の仲介で、名古屋で4人が集まり世話人会を開催し、研究会を再スタートさせることを確認した。以下は、同日の世話人会で確認した内容である。

① 火打石研究会改め発火具研究会の活動方針（確認事項）

- 一、会の名称 「発火具研究会」と改称する。
当面は「火打石研究会改め発火具研究会」とする。これはより幅広く研究の対象を発火具全体に広めることを示している。
- 二、ニュースレター
 - ・年一回程度、会の活動記録として、ニュースレターを発行する。
 - ・名称は「シレックス」を継承し、既刊の第1号から連続して、次は第2号を出す。
 - ・ニュースの性格は、各自がそれぞれの地域や様々な雑誌等に研究を発表し、それをニュースで紹介していく方向とする。
 - ・シレックス第2号の発行に合わせ、HPに第1号と第2号をPDFで掲載する。

三. 見学会・研究会

見学会もしくは研究会を年1回程度開催する。これを研究会の中心的活動と位置づける。

四. 幹事

本研究会は、水野裕之、大西雅広、北野隆亮、小林克の4人を世話人改め幹事

とし、幹事会で研究会の事案等様々なことを決定していく。なお、当副会长は小林、副会長は北野が担当する。

五. その他

入会希望者は、HPにその旨、通知してもらおうか、4人の幹事の誰かに連絡する。なお、当面、会費は無料とする。

発火具研究ニュース

◎発火具研究会の予定

・2016年度発火具研究会・見学会

2016年11月12日(土)、13日(日)に徳島県阿南市大田井の火打石採掘に関する見学会・研究会を計画しています。現時点での予定では12日午後から見学会、夜は近くに宿泊し、13日は火打石採掘関連の見学を行い正午頃に解散という方向で検討を進めて

います。

詳細は決定次第、ホームページに掲載します。参加希望の方は、幹事にコンタクトを取るか、HPに連絡を下さい。なお、相当険しい山中に分け入り、小雨決行いたしますので、健康や長時間の歩行に不安のある方はご遠慮下さい。

研究会・見学会報告研究会・見学会報告

美濃国養老瀧産の火打石」を訪ねて

～第2回火打石研究会見学会～

水野裕之

1 はじめに

江戸時代末期の『雲根志』(木内石亭著)で、山城国鞍馬とともに、火打石の名産地として記された「美濃国養老瀧」あたりで産する青灰色のチャートは、東南部へ約35km離れた尾張の名古屋城下町をはじめ、尾張地域の遺跡の発掘調査の際、近世の遺構や包含層から、同質の石が消費された火打石としてみつかっています。

名古屋地域の火打石は、これまでの発掘調査成果から、中世～江戸時代の中頃までは、在地の川原や礫層中にある黄色や赤色系のチャート礫や石英礫を採集し、割って使っていたようです。ところが、18世紀の第4四半期頃以降から明治時代前半頃にかけての土坑などから、陶

磁器等に伴って出土する火打石のほとんどは、養老瀧で産する青灰色で1ミリ間隔の縞目のあるチャートと同質のものが使用されています。このことは、当時おそらく商品として定着し、流通していたことを考古資料が示しているといえます。

先にあげた『雲根志』にあるように、地元ではブランド品になっていたことが想像されます。ただ現在のところ、採掘場所等についての文献資料については、十分な資料がつかめていない状態です。そのような段階ですが、まず現地踏査しようと会長の小林克さんはじめ総勢5名で見学会を実施しました。案内役は、出土火打石と同質のチャートを岐阜県養老郡養老町の養老の滝付近で検出した会員の水野が担当しま

した。

2 現地見学会

2006年11月25日(土)、26日(日)の1泊2日の日程です。参加者は、小林克、北野隆亮、大西雅広、船築紀子、水野裕之

●一日目 (25日)

この日は午後1時に岐阜県の近鉄大垣駅前に集合とし、近鉄電車にて養老へ向かう予定でしたが、大西雅広さんが、群馬から車で来てくれたおかげで、車の旅になりました。

(大西さんに感謝)

《日程》

大垣駅集合⇒養老の滝(養老自然公園内)
〔①滝谷(火打橋付近)の転石観察～②養老神社～③養老の滝～④唐谷(ヒウチ谷)の転石観察〕⇒⑤菊水旅館泊

●二日目 (26日)

《日程》

掬水旅館出発⇒⑥(財)愛知県埋蔵文化財センターで資料見学⇒⑦熱田神宮(日割御子神社他、昼食)⇒⑧名古屋市見晴台考古資料館で資料見学⇒解散

以上、概ね当初の予定どおりに行程が進みました。養老公園は紅葉シーズンで多くの観光客が来ていました。(以下は、①～⑧までの見学概要です)。

- ①：養老の滝から流れる川原は観光用に整備されていますが、10～20cm大の石灰岩やチャート塊が主に散布していました。チャートは、出土火打石に多い青灰色のもの以外の色調の石もありました。
- ②：養老神社境内には、菊水と呼ばれる湧き水があり、有名な孝行息子が老父のために汲んだ水がこの場所ともいわれています。この水は、昭和60年に環境庁選定の「名水百選」

に選ばれています。ペットボトルに入れて飲みましたが、甘露、甘露です。泊まった掬水旅館の横にある店で、この水で淹れたコーヒーをたのしみました。

- ③：養老の滝のすぐ手前には、チャートなどの巨岩がみられます。養老の滝の石碑の横のチャート塊は、縞目(層理)がみられます。
- ④：いくつかの砂防帯(ダム)がつくられ、本来の地形が変わっていると思われませんが、水の無い谷をさかのぼりました。このあたりはヒウチ谷とも呼ばれていて、電話帳ほどの大きさの火打石と同質で良質なチャートがみつかりました。ただし、大量に散布するようなところはみつからず、採掘についての手がかりはありませんでした。
- ⑤：旅館の部屋から東側を眺めると、はるかに濃尾平野が広がって見えました。手前には、紅葉が美しく色づいています。
- ⑥：埋蔵文化財センターでは、休日のところ松田訓さん、宮腰健司さんに案内して頂き、愛知県一宮市と大府市出土の江戸時代後期の火打石を観察しました。一宮市の街道沿いの町屋(市場町)にあたる遺跡の出土品のなかに、徳島県の大田井産の美しい水色チャートの火打石が1点みつき、注目されました。大府市の資料は、複数の土葬墓の副葬品に火打金とともに養老瀧産チャートの火打石がはいっていたものです。
- ⑦：熱田神宮には、ヤマトタケルの草薙の剣が祀ってあります。境内の南端には、彼が焼津で襲われた際に使った、おばのヤマトヒメから賜った燧袋(火打具)を納めたという日割御子(ひさきみこ)神社があります。
- ⑧：名古屋市見晴台考古資料館は、弥生時代後期の環濠集落のうえに建っているサイトミュージアムです。市民参加で行う見晴台遺跡発

掘調査で有名です。ここではまた、名古屋市内の遺跡の発掘調査を行なっています。ここでは市内の遺跡で出土した戦国時代や江戸時代の火打石を観察しました。いわゆる養老瀧

産のチャートが流通する以前の橙色などのチャート礫を素材とした戦国時代の火打石が多数ありました。



養老溪谷での養老石採集状況



岐阜県養老町（石材産地）採集のチャート



名古屋城三の丸地区出土のチャート円礫
素材の火打石（戦国期）



名古屋城下町出土の養老瀧産チャート
の火打石（江戸時代後期）



名古屋城三の丸地区出土の江戸時代のチャート
円礫素材の火打石（江戸時代中期）

ニュースレター シレックス vol.2

発行 発火具研究会

発行日 2016年5月28日

編集 小林 克

hp <http://www.ne.jp/asahi/hiuti/isi/>

連絡先 〒215-0027

神奈川県川崎市麻生区岡上1624-5 小林克気付 火打石研究会

注意 本誌を引用する場合は、必ず出典・筆者等引用した旨を明記して下さい。

【編集後記】 第二回研究見学会が 2006 年であったので、10 年程休止していましたが、何とか再開することとなりました。これからは無理のない範囲で、長く続けていきたいと思ひます。なお HP からは第 1 号、本号共にダウンロード出来ます。